

〔物類稱呼五語〕他の呼に答る語、關東にてあいと云、畿内にてはいと云、近江にてねいと云、長門邊にてであついと云、薩摩にてをくと云、肥前にてなはいといふ、土佐にてゑいといふ、又又つともいふ、ないともやつ、越後にてやいと云、越前にてやつといふ、陸奥にてなはいと云、

案に國々のこたふる詞大いに同じくして、少く異也といへども、各轉語なるべし、有が中にを、といへるは、諸國にて下輩にこたふる語なるに、九州にては上さまの人に對して、かくの如く答る所も有也、俗間に應の字を書もあれど、を、は和訓なれば、唯々書べきよし、先哲も沙汰し侍る、漢書に唯々注 恭應之詞ト有、枕草子にを、と目うち引てと有、

を、くといへどた、くや雪の門

丈艸

能辯

〔類聚名義抄五語〕胡快反 〔同二〕响叫相

〔下學集下〕點畫少異字 〔欺上〕能言、下屈也

〔伊呂波字類抄左〕諛〔辨サキ〕辭也

〔新猿樂記〕五郎者、天台宗學生、大名僧也。中 內論議第一番宏才博覽、而論議決擇之、ケチキ 破滿座惑、

〔倭訓栞前編久〕くちさきさら 倭名抄に吻又喙をよめり、口裂の義成べし、又くちわきともいへり、

源氏に辨舌をゆたけささきらといへるも是也、

〔源氏物語三十八〕かうしのいとたうとく、中 たゞ今の世に、さえもすぐれ、ゆたけささきら、をい

と、心して、いひつゞけたる、いとたうとければ、下

〔日本書紀三十一〕持統 朱鳥元年十月庚午、賜死皇子、大津於譯語田舍、中 皇子大津天淳、中原瀛真人、天皇

武天 第三子也、容止墻岸音辭俊朗、

〔懷風藻〕釋智藏二首

智藏師者、俗姓禾田氏、淡海帝世、遣學唐國、中 太后天皇、統 世師、向本朝、同伴登陸、曝涼經書、法師